

古事記を読む会 2014年11月9日 NO.6

10月5日（日）午前10時から第6回古事記を読む会が開かれた。今回は、新たに中巻に入ることになる。中巻の第一代神武天皇から第9代開化天皇まで音読した。神武天皇の東征から五瀬命の戦死、熊野の高倉下、八咫鳥の先導と有名な場面が続いた。ヌナカワミミ以降、業績のしるされない天皇が続き、氏姓の系譜が示される。

第6回で話題になったのは、神武東征で出会う人は重要な人物であるという指摘。井水鹿、石押分之子は、当時の先進技術をもつ人との出会いである。鉱山技術。土木技術。高倉下は武力を示す。出会う人に着目してその時代を考えると面白いと思う。

また、「日子刺肩別命」が第7代孝霊天皇の皇子とあり、利波臣の祖先にあたると記述してある。

また、神武天皇が亡くなったあと、先妻の子である当芸志美々が神武のお后であった伊須気余理比売を娶ったことや、当芸志美々を伐とうとしてその子息長男神八井耳ではなく弟神沼河耳が伐った事により建沼河耳命といって2代綏靖天皇となっている。兄は忌人（いはひひと）となっている。なぜ弟が相続したか？

【心に残ったこと等・・・会員のメモから】

- ・短い文章の中でもいろいろ考えられるのが奥深いと思った。言葉一つ一つに意味があり、何かを表しているなど、計算された物語ですばらしいと思った。
- ・末子（弟）が最終的に勝利し権力を握っているという意見に対して古事記を理解する上で大変興味深いと思った。この意見における理由を考えるにあたって、当時の歴史的背景はさることながら世代交代つまり世の常（常理）または力のある者が、のし上がる等という様々な考え方になるほど感じました。
- ・神武の正妻であるイスケヨリヒメが神武亡き後、先妻の息子の嫁になることが不可解である。
- ・久しぶりに参加しましたが楽しかったです。イズミ先生の言葉の語源、元を辿るお話に興味を持ちました。

※ 欠史八代の間には多くの有力豪族の始まりが記されている。『古事記』を編纂した太安万呂の太氏の氏祖注はカムヤイキミミの下に記されている。自らの家系を王家の系譜の組み入れたとも考えられる。

※欠史八代が示すものとは？ 大和朝廷の成立時期については、3世紀の末頃から、大和地方に諸豪族が現れ始め、4世紀中頃に統一されて誕生したと考えられます。こうした中で、欠史八代の天皇はそれぞれ磯城春日、十市など大和地方の諸豪族を後に迎えています。これは、大和朝廷が拡大していく中で、大和国内の諸豪族との統合や戦いによる制圧を示していると考えられます。

（※は、西東社 『図解古事記・日本書紀』より）